

ストーリー

■瀬戸内海航路を掌握した「村上海賊」

1586 年、堺を出港し、瀬戸内海を西へ航海していた宣教師ルイス・フロイスは、芸予諸島のある島に近づいた時のことを次のように記している。「その島には**日本最大の海賊**が住んでおり、そこに大きな城を構え、多数の部下や地所や船舶を有し」、「強大な勢力を有していた」(『完訳フロイス日本史』)、と。フロイスをして「**日本最大**」と言わしめた海賊。それが「**村上海賊**」である。

瀬戸内海を東西に分断するかのように、島々が南北に密集して連なる「**芸予諸島**」。一見、穏やかに見える海況だが、狭い海峡(瀬戸)にいざ船を進めると、大潮時には高低差3m以上にもなる潮の満ち干きや、最大 10 ノット(時速約 18 km)の潮流が容赦なく襲う。古来より航海者を悩ませてきた**海の難所**である。「船に乗るより潮に乗れ」。この地域に古くから受け継がれる漁師たちの言葉がそれを物語る。

村上海賊は、このような芸予諸島の**因島(広島県尾道市)**、**能島(愛媛県今治市)**、**来島(同)**に本拠をおいた**三家**からなる。同じ村上姓を名乗る三家は強い同族意識を持ち、それぞれの領内に多くの「**海城**」を築いた。フロイスが見た「大きな城」は、これらの海城である。

因島村上氏は余崎城、美可崎城、長崎城、青木城など、沿岸部に海城を築き、安芸・備後国の陸地部に沿った航路(安芸地乗り)を押さえた。能島村上氏は能島城を中心に芸予諸島の中央を通過する最短航路(沖乗り)を、来島村上氏は来島城を中心に四国側の航路(伊予地乗り)を押さえ、**三家が連携をして芸予諸島の全域を掌握した**。

多くの海城の岩礁には、高低差のある潮の満ち引きに影響されず、いつでも船が係留できるように、陸から海に向かって柱が立ち並んでいた。また海岸部を埋め立てて平坦面を造成し、荷揚げや海産物の加工場、造船や修理場に利用されていた。海城には海賊たちが住み込み、海戦に備える一方で、そこを拠点として多様な海上活動に従事したのである。さらに能島城や来島城などは、その対岸に「**水場**」と呼ばれる海城に水や物資を供給する場を持ち、その一帯を城下町として生活の本拠としていた。航路に面した前線の活動基地である「海城」と、その対岸にある集落が一体となって、村上海賊の本拠地が形成された。**南北に連なる芸予諸島の地の利を最大限に活かし、「海城」を航路の要衝に配置することで「海の関所」とし、瀬戸内海の東西交通を支配したのである。**

■全盛期における村上海賊の海上活動

一般に「**海賊**」と聞いて思い浮かぶのは、理不尽に船を襲い金品を奪う無法者の姿。いわゆる「パイレーツ」であろう。しかし村上海賊の海上活動の実態を正しく紐解けば、決して悪者ではなく、むしろ**瀬戸内海交通の秩序を支える上で不可欠な存在**であったことがわかる。

村上海賊が歴史上に姿を現したのは南北朝時代である。1349 年には「野嶋」(能島村上氏)の名が見られ、東寺領の荘園であった弓削島に入る幕府の**船を警固する役割を持った勢力**として登場した。この頃には海上の小勢力の一つに過ぎなかったが、やがて因島村上氏が遣明船の警固を守護大名から命じられるなど、村上三家は陸の勢力との結束を固め、芸予諸島を本拠に瀬戸内海の主要な航路や港を掌握する一大勢力へと成長した。

戦国時代、村上海賊が活躍した海戦は枚挙に暇がないが、その代表的な海戦として、村上三家が連携をして織



瀬戸内海航路と主要海城の分布



村上海賊の海城・能島城と周囲の潮流(愛媛県今治市) 撮影者: 添畑薫氏

田信長方の船団に勝利をおさめた第一次木津川口合戦がある。中国地方の大名・毛利輝元は、室町幕府最後の将軍・足利義昭の命を受けて、信長と対峙する石山本願寺へ兵糧を運び込もうとする。毛利軍の主力であった村上海賊は、**海の難所で培われた巧みな操船技術**で敵を取り囲み、「ほうろく火矢」という火薬を用いた武器を用いて信長方を撃破し、無事に兵糧を運び入れることに成功した。この合戦で海賊の力を知った信長や羽柴秀吉は、海賊を味方につけ瀬戸内海の制海権を握るべく、懷柔作戦を展開する。村上海賊の存在は、**天下人や陸の大名の動向をも左右した**のである。

一方、平時には**芸予諸島の海城を拠点に様々な海上活動を展開**した。その一つが「**海の安全保障**」である。

芸予諸島に近づいたフロイス一行は、海賊に襲われる危険を回避し、航海の安全をはかるため、「署名」によって瀬戸内海を自由に通行できるよう、村上海賊に好意ある寛大な処遇を求めた。すると村上海賊は、「怪しい船に出会った時にみせるがよい」『完訳フロイス日本史』と言い、紋章が入った絹の旗と署名を渡した。フロイスらが手にしたこの旗が後に「**過所船旗**」と呼ばれる**通行許可証**である。村上海賊はこの旗を配布し、あるいは海賊を船に乗せて**水先案内**を行うことで、津々浦々に潜む他の海賊や航路の難所から船を守り、その対価として通行料を徴収した。海の難所であるからこそ、この掟は重視され、大名や商人の船はこれに従うことで航海の安全が保障されたのである。この通行料を徴収する海の関所を「**札浦**」と言うが、芸予諸島を基点として、全盛期には九州北部から畿内における航路の要港に「札浦」が設けられるほどに勢力を拡大した。

また海の安全保障者のほかに「**商人**」の顔も垣間見ることができる。能島城の目と鼻の先にある見近島は、商品である中国産の貿易陶磁器や備前焼を一時的に保管する物流の基地であった。村上海賊が物資流通に関与することにより、その**本拠地である芸予諸島には国内外の高級な品々や優雅な文化がもたらされた**のである。

■村上海賊の生活・文化

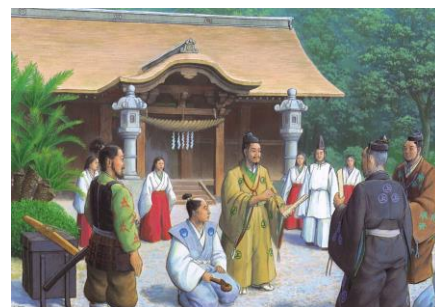
とかく猛々しいイメージで語られる海賊であるが、大名と同じように、優雅に茶や香をたしなむ「**文化人**」でもあった。また高い文学の教養を持っており、それを知るものとして、大山祇神社(今治市大三島)に奉納された「**法楽連歌**」がある。神の島と呼ばれる大三島に鎮座する大山祇神社は、その歴史は古代にさかのぼり、日本総鎮守、伊予国の一宮とされ、武功や海上交通の安全を守る神として海賊たちの信仰を集めた。このような由緒のある神社で、村上海賊の武将たちは自らの思いを詠み連ね、それを奉納することで武運を祈願したのである。因島では、武運を祈り、戦勝を祝って踊ったとされる「**棕浦の法楽踊り**」が現代に伝わっている。

さらに村上海賊には「**漁業者**」としての顔もあった。瀬戸内海の新鮮な魚介類を獲り、時には、それをお歳暮として陸の大名に送り届けた。芸予諸島で食される海鮮料理「**法楽焼**」や「**水軍鍋**」は、村上海賊時代から伝わる郷土料理とされており、豪快に盛られた海の幸に、海賊たちの食文化を垣間見ることができる。

このように、村上海賊が築いた海城群、海賊たちが崇めた寺社、伝統を受け継ぐ海の文化は、現在もこの地域に色濃く残っている。**尾道・今治をつなぐ現在の芸予諸島をゆけば、瀬戸内海随一の美しい多島海とともに、中世の瀬戸内海航路を支配し、“日本最大の海賊”と称された村上海賊の記憶をたどることができる。**

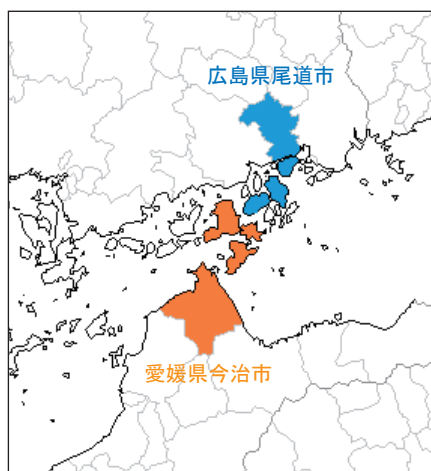


「怪しい船に出会った時にみせるがよい」
村上海賊から交付される過所船旗

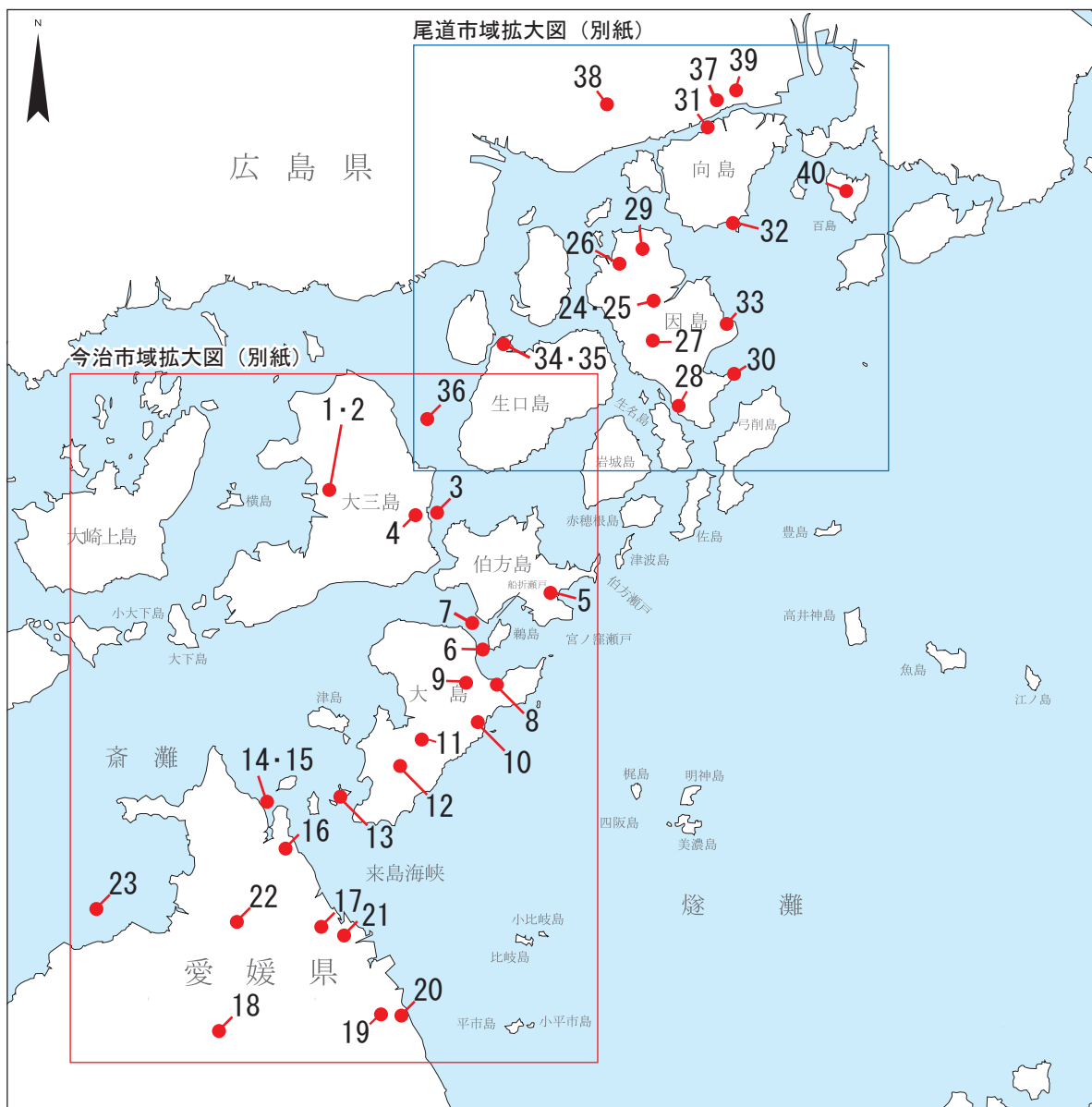


大山祇神社で法楽連歌を詠む海賊たち
(香川元太郎画)

市町村の位置図（地図等）

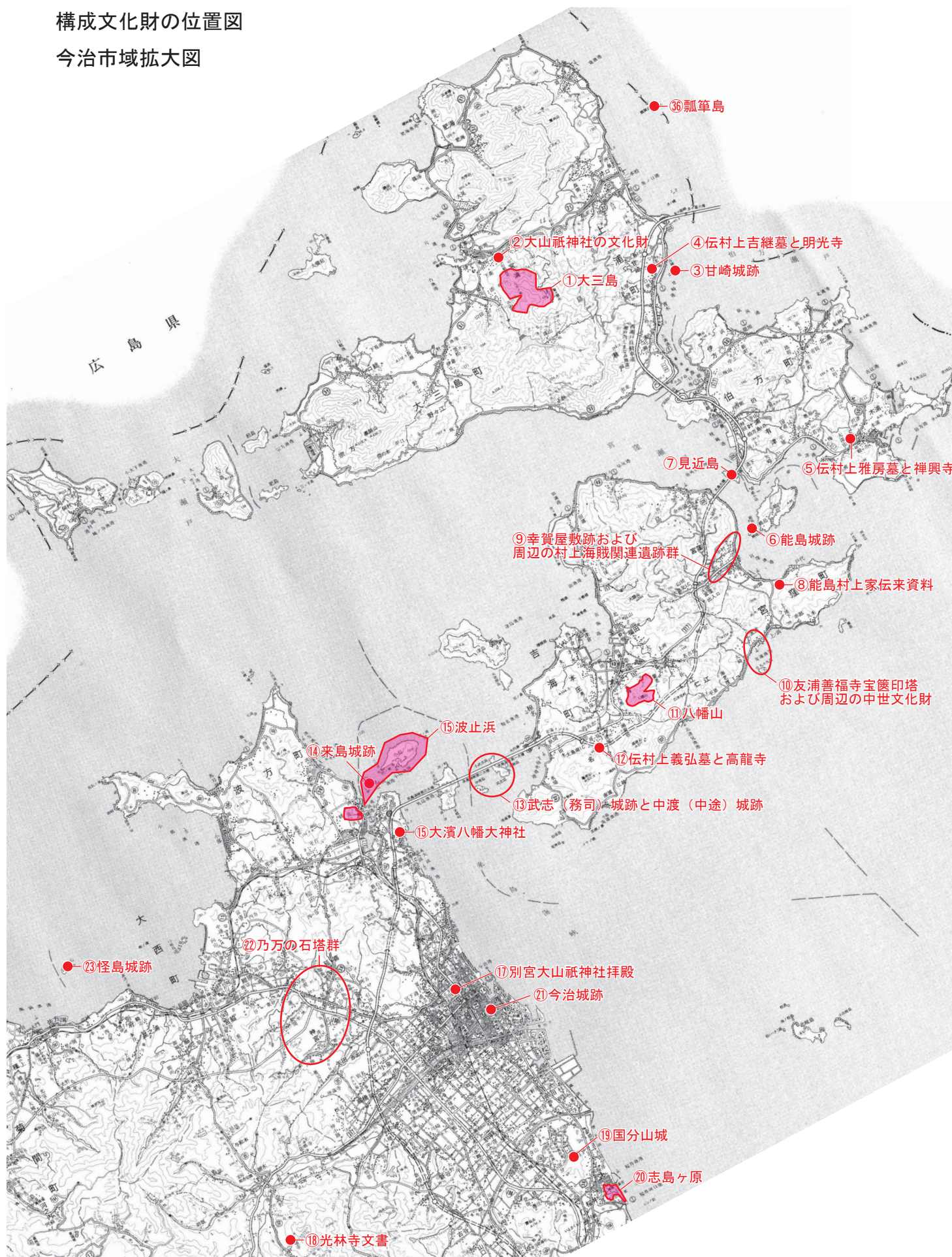


構成文化財の位置図（地図等）



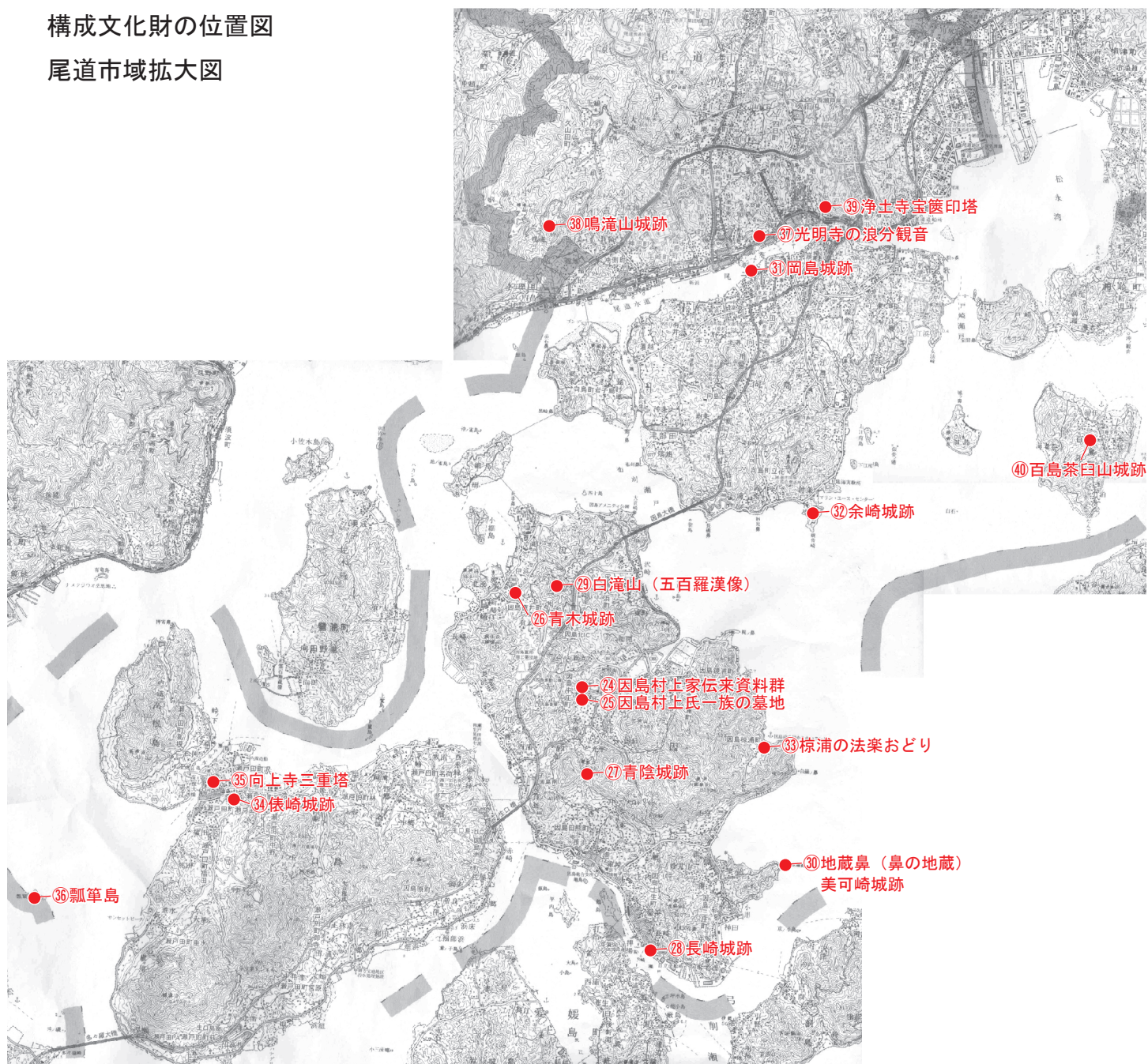
構成文化財の位置図

今治市域拡大図



構成文化財の位置図

尾道市域拡大図



ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	おおみしま 大三島	国名勝	村上海賊が本拠を置いた芸予諸島の多島美を象徴する景観が残り、村上海賊が氏神として崇めた大山祇神社が鎮座する。	今治市
②-1	おおやまずみじんじや 大山祇神社の文化財	国宝・国重文・ 国天然記念物	村上海賊ら海の武将たちは、境内にクスノキが群生する荘厳な雰囲気が漂う大山祇神社を氏神として崇め、武運や海上交通の安全を祈った。名高い武将らが奉納したとされる武具・武器類の中に、村上海賊の武将もその名を連ねる。鎌倉末期の巨大な宝篋印塔は、尾道の大工念心の銘が刻まれ、職人たちの活発な南北の交流を見ることができ、このような芸予諸島の紐帯関係を背景に、村上海賊がこの地で台頭したと考えられる。	今治市
②-2	大山祇神社法楽連歌 ほうらくれんが	国重文(典籍)	戦国時代には、連衆の中に村上海賊の武将たちの名も見え、海賊の高い教養や文化力を知ることができる。海賊たちは由緒ある大山祇神社で自らの思いを詠み連ね、武運を祈ってそれを奉納した。	今治市
③	あまぎき 甘崎城跡	県史跡	中世には、能島村上氏系の今岡氏や村上吉継(来島村上氏)の拠点であった。島全体を城郭として利用した海城で、海の難所とされる鼻栗瀬戸を押さえる位置にある。村上海賊が去った後も、藤堂氏によって近世城郭として改修された唯一の中世海城。	今治市
④	よしつぐ みようこう 伝村上吉継墓と明光寺	未指定	村上吉継の墓と地元で言い伝えられている宝篋印塔が祀られている。明光寺は、村上吉継の居城であった甘崎城の対岸にある「水場」集落にあり、近世初期に甘崎城を改修した藤堂氏がこの地に移したとされる。	今治市
⑤	まさふさ ぜんこう 伝村上雅房墓と禅興寺	市天然記念物	はかた きのうら 伯方島木浦地区にある禅興寺は、能島村上氏の村上雅房の菩提寺と言われる。近くには、樹齢 600 年を超えるとされるオオクスがあり、その根元に雅房夫妻の墓があったと地元で伝わっている。	今治市

⑥	のしま 能島城跡	国史跡	能島村上氏が居城とした典型的な海城で、大島と鶴島との間の宮窪瀬戸にある。島の頂部から三段に削平して郭とし、東側、南側に延びる鼻の頂部にも出郭を形成した。周囲の岩礁地帯には、護岸や船を繋ぐための施設である無数の柱穴が残る。南北朝時代から戦国時代末期に機能した。	今治市
⑦	みちかじま 見近島	未指定	能島城の北方約 1 km に位置する能島村上氏の物流基地。小規模集落から、大名の城館に匹敵する質・量の貿易陶磁器や備前焼など流通品が出土した。	今治市
⑧	のしま 能島村上家伝来資料群	市有形含む	今治市村上水軍博物館で保管・展示している能島村上家に伝わる資料。全盛期の当主、村上武吉が着用したと伝わる猩々陣羽織や、中世の黒韋威胴丸、色々威腹巻などがある。	今治市
⑨	こうがやしき 幸賀屋敷跡および周辺の 村上海賊関連遺跡群	市史跡	能島村上氏の陸地部の拠点集落推定地。「幸賀屋敷跡」や隣接する「さんの遺跡」では、14 世紀から 17 世紀初頭にかけての遺物が出土し、その背後に延びる丘陵には郭跡が確認され、「宮窪城」と地元では呼ばれている。近くには村上氏の菩提寺とされる旧証名寺跡があり、その周辺には、「かしや(鍛冶屋)」「ばんぢよ給(番匠給)」など城下町を思わせる地名が残る。また能島城対岸には「水場」という地名が残り、能島城に水や物資を供給する拠点であったと推測される。さらに、現在の証明寺および海南寺には中世の宝篋印塔が残るなど、陸地部には村上海賊時代の文化財が色濃く残っている。	今治市
⑩	ともうらぜんぶくじほうきとういんとう 友浦善福寺宝篋印塔および 周辺の中世文化財	国重文(石造美術)・市有形	村上海賊の前身となる伊予大島の有力な勢力が存在していたことを示す鎌倉時代末期、嘉暦元(1326)年銘が入った宝篋印塔。友浦地区周辺には、鎌倉時代中期の善福寺地藏菩薩立像など、同時代の文化財が多く残る。その沖合には、村上海賊の時代の海城、九十九島城が築かれた。	今治市
⑪	やわたやま 八幡山	国名勝	村上海賊が活動した島々の美しい景観が眼下に広がる景勝地。大島のほぼ中央部にある標高 215m の八幡山の頂上からは名勝大三島、同波止浜をはじめ、瀬戸内海一帯の島々を眺めることができる。	今治市

⑫	伝村上義弘墓と高龍寺 よしひろ こうりゅう	未指定	南北朝時代に活躍したとされる村上氏の伝説的武将、村上義弘の墓と地元で伝わる宝篋印塔とその菩提寺。義弘の人物像は不明だが、南朝方を救った武将として、村上武吉と並んで地元では英雄的存在。	今治市
⑬	武志(務司)城跡と中渡(中途)城跡 むし なかと	未指定	来島海峡を押さえるために築かれた能島村上氏の海城。来島海峡の西側は来島村上氏の来島城が、中央と東側は能島村上氏が分担をして海峡を支配した。1585 年、羽柴秀吉の四国平定により、能島村上氏は両海城を明け渡した。	今治市
⑭	来島城跡 くるしま	未指定	来島村上氏の居城であった来島城。島の自然地形を活かして多くの郭が築かれた。島の周囲の岩礁には、無数の柱穴があり、船を繋ぐための施設が充実している。関ヶ原合戦後に廃城となったと考えられる。	今治市
⑮	波止浜 は し はま	国名勝	来島村上氏の居城、来島城を含む芸予諸島の多島美を象徴する景勝地。村上海賊が生きた当時の景観が残る。	今治市
⑯	大濱八幡大神社 おおはま	未指定	来島城の城下町として史料に登場する大濱地区に鎮座する。大永4(1524)年の同社造営棟札は、来島村上氏が来島城に在城していたことを示す初見史料である。	今治市
⑰	別宮大山祇神社拝殿 べっく おおやまずみ	県有形	天正3(1575)年に来島村上氏の村上通総 みちふさ が拝殿を修築した大山積神を祭神とする神社。	今治市
⑱	光林寺文書 こうりん	市有形	能島村上氏全盛期の当主村上武吉が同寺に灯籠を寄進したことを示す古文書。	今治市
⑲	国分山城跡 こくぶんさん	未指定	天正 12(1584)年に村上武吉が普請(築城・改修)した今治平野の拠点城郭。今治城が築かれるまで機能した。	今治市
⑳	志島ヶ原 ししまがはら	国名勝	かつて村上海賊が眺めた瀬戸内海を象徴する「白砂青松 はくさいしょう 」の景勝地。村上海賊が普請した国分山城の麓に広がる。	今治市
㉑	今治城跡 いまばり	県史跡	村上氏が去った後、国分山城に替わって藤堂高虎が築いた当時最新鋭の近世海城。来島海峡の地政学的重要性が村上海賊時代から継承されたことを示し、芸予諸島に残った海の人々がこの城を舞台に活躍した。	今治市

②②	の ま 乃万地区の石塔群	国重文(石造 美術)	村上海賊の時代に発展を遂げる島々をつ なぐ南北の交流の礎となった、鎌倉時代 末期から南北朝時代の石造文化を代表す る宝篋印塔群。かつて「乃万」と呼ばれた 延喜・野間・神 宮 地域などに多くみられ る。その意匠に芸予諸島を介した職人の 移動の証を見ることができる。	今治市
②③	け し ま 怪島城跡	市史跡	来島村上氏の家臣である神野左馬允の居 城と伝わる城。小島全体を城郭化した海 城で、島の頂部に郭が形成される。	今治市
②④	いんのしま 因島村上家伝来資料群	県重文・市重 文	因島水軍城で保管・展示している因島村 上氏の末裔に伝来する資料白紫緋糸段 緘腹巻 一領、紙本着色村上新蔵人吉充 像 一幅、紙本墨書因島村上家文書 卷子 3 巻などがある。	尾道市
②⑤	いんのしま 因島村上氏一族の墓地	市史跡	因島村上氏の本拠であった中庄に造営 された菩提寺に、かつて分散していた因 島村上氏一族や家臣の墓とされる宝篋 印塔 18 基と多くの五輪塔が裏山の墓地 に集積されている。	尾道市
②⑥	青木城跡	県史跡	因島村上新蔵人吉充が 向 島の余崎城よ り移り居城した。因島のほぼ北端、城は 現在の重井東港を望む小丘陵上に在り、 比較的旧状をよく保った郭が 5 段重な り、武者走りも残っている。	尾道市
②⑦	あおかげ 青陰城跡	県史跡	この城は海城ではなく、戦国山城であり 長崎・青木・余崎などの連絡場所であつ た。因島村上氏が戦国大名の性格をもつ と、本城の役割を果たすようになった。 因島のほぼ中央部、風呂山と龍王山に挟 まれた青影山頂にあり、三庄方面を除く 島のほぼ全域及び周辺海域が見渡せる 場所に位置している。	尾道市
②⑧	長崎城跡	県史跡	因島村上氏の初期の本拠地で、海側には 岩礁ピットも残っている。航路を見張る 重要な拠点であった。因島の南西部、瀬 戸に面した海城であり、背後の丘陵には 荒神山城跡がひかえる。	尾道市

②⑨	しらたきやま 白滝山（五百羅漢像）	市名勝	白滝山は因島村上氏の村上吉充が青木城を築いたとき、この山を控えの要害として設定し観音堂を造営した。その後、柏原伝六は観音道一観と称し大石仏三尊像や、五百羅漢の石仏工事に着手した。一体ずつ顔が異なる石仏は 700 体ほどあり、松林と岩石の自然に溶け込んで独特の雰囲気醸し出している。	尾道市
③⑩	地藏鼻（鼻の地藏）、 美可崎城跡	市史跡	美可崎城は、航路に面した海城で、古くから海の関所として機能していた。郭跡や船隠しなども残っている。地藏鼻は、戦国時代の石造物で美可崎城の武将と船で通った娘との悲しい伝説を残す巨岩に彫られた石仏である。	尾道市
③⑪	岡島城跡	未指定	港町尾道の玄関口に位置し、かつては、「関の大將」と呼ばれた大海賊の居城であったが、その後、小早川隆景と手を結んだ因島村上氏により、駆逐され、因島村上氏の城となった。	尾道市
③⑫	よざき 余崎城跡	未指定	弘治元年の厳島の戦いでの報償として向島を得た村上氏の本拠地として、因島に面した向島南部の半島に築かれた海城である。岡島城跡とともに港町尾道への航路をにらむ重要な拠点であった。郭跡や船隠しなどが残り、また、現在でも当時の姿の美しい景観を残している。	尾道市
③⑬	むくのうら 棕浦の法楽おどり	県無形民俗	村上海賊が、出陣の時は棕浦で戦いの勝利と隊士の安全を祈り、帰陣の際は勝利を祝うとともに戦没者の追悼を行ったというが、その時の行事が「法楽おどり」の起源であるという。侍らしい軽装に太刀、早駆けの姿勢や跳ぶような動作、六字の名号に大幡など、現在でも続く伝統芸能である。	尾道市
③⑭	たわらさきじょうあと 俵崎城跡	未指定	村上海賊とともに毛利氏に従っていた生口氏の居館的役割を果たした海城である。当時尾道に次ぐ港町であった瀬戸田を管理していた生口氏によって築かれた。生口氏は、第一次木津川口合戦において村上三家とともに、毛利方の武将に名を連ねた芸予諸島の海の勢力。	尾道市

③⑤	こうじょう 向 上 寺 三 重 塔	国 宝	向上寺は生口氏が創建した寺院であり、室町時代初期建立の三重塔は多島美と調和した美しい景観を形成している。	尾道市
③⑥	ひょうたん 瓢 箆 島	国登録記念物 (名勝地)	村上海賊がかつて闊歩した島々の景観を代表する景勝地。瓢箆のような形から名前がつけられた。大三島と生口島の間にあり、両島の神が島に綱をかけて引き合ったため、島の中央がくびれてしまったというユニークな伝説がある。	今治市・ 尾道市
③⑦	なみわけかんのん 光明寺の浪分観音	国重文	村上海賊の武将、島居資長が寄進したもので、水軍の海難を防ぐ信仰として、浪分観音の異名がある。村上海賊と港町尾道の関係がうかがえる資料。	尾道市
③⑧	鳴滝山城跡	市史跡	鳴滝山城は、港町尾道の玄関口に位置し、城主宮地氏は尾道の海運を監視する役割を担ったが、鳴滝山城はその後攻め落とされ、城主宮地氏は因島村上氏を頼り、因島に移った。その後、村上氏の家老として、港町尾道の海運力を水軍の交易力に生かし尾道と水軍をつなぐ役割を果たした。	尾道市
③⑨	浄土寺宝篋印塔	国重文	村上海賊が史料上に登場する南北朝時代の宝篋印塔。「越智式」と呼ばれる芸予諸島から今治平野に見られるタイプで、村上海賊時代に発展を遂げる島々を介した南北の交流の礎とも言える石造物文化。それを示す尾道側の代表的事例である。	尾道市
④⑩	ももしま 百 島 茶 臼 山 城 跡	未指定	1504 年、因島村上氏の村上喜兵衛義高が百島に築いた城。百島は、尾道と鞆の浦のほぼ中間にあり、山陽側の航路の要衝として重要な位置にある。	尾道市
④⑪	ほうらく 法 楽 焼	未指定	尾道市から今治市にかけて食される伝統料理。起源は定かではないが、法楽焼は、村上海賊の武器「ほうろく」にちなんだ料理で、戦勝の祝いに食べたとも伝わる。	今治市・ 尾道市

④②	水軍鍋	未指定	尾道市から今治市にかけて食される伝統料理。起源は定かではないが、水軍鍋は芸予諸島で獲れた海の幸を鍋にしたもので、海賊たちが新鮮な魚介類を船の上で豪快に食していたことに由来するという。	今治市・尾道市
----	-----	-----	---	---------

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

構成文化財の写真一覧

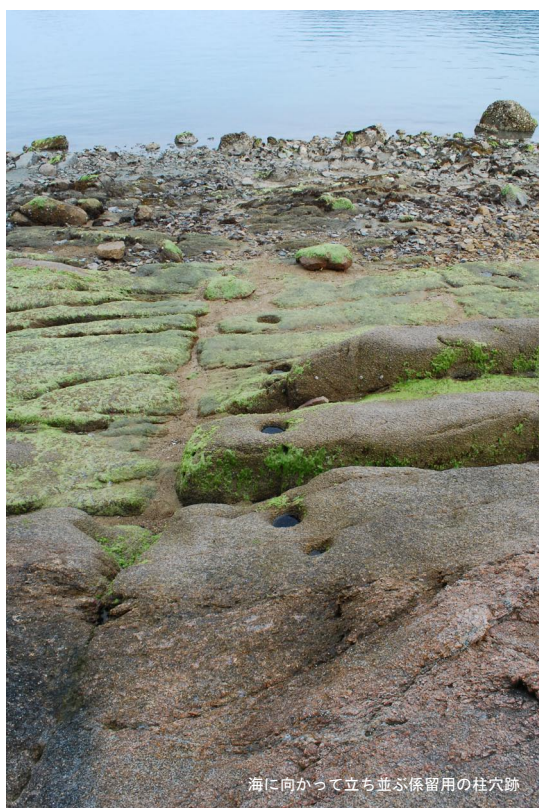
①大三島



③甘崎城跡



②-1 大山祇神社の文化財



②-2 大山祇神社法楽連歌



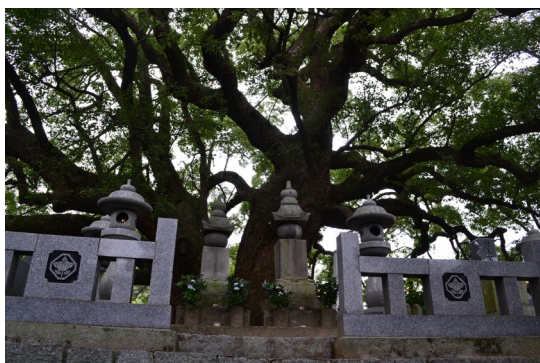
海に向かって立ち並ぶ係留用の柱穴跡

構成文化財の写真一覧

④伝村上吉継墓と明光寺



⑤伝村上雅房墓と禅興寺



⑥能島城跡



⑦見近島



構成文化財の写真一覧

⑧能島村上家伝来資料群



⑨幸賀屋敷跡および周辺の村上海賊関連遺跡群



⑩友浦善福寺宝篋印塔および周辺の文化財



⑪八幡山



構成文化財の写真一覧

⑫伝村上義弘墓と高龍寺



⑬武志（務司）城跡と中渡（中途）城跡



⑭来島城跡



構成文化財の写真一覧

⑮波止浜



⑰別宮大山祇神社



⑯大濱八幡大神社



⑱光林寺文書



構成文化財の写真一覧

⑭国分山城



⑮乃万地域の石塔群



⑯志島ヶ原



⑰今治城跡



⑱怪島城跡



構成文化財の写真一覧

②④ 因島村上家伝来資料群



②⑤ 因島村上氏一族の墓地



②⑥ 青木城跡



②⑦ 青陰城跡



②⑧ 長崎城跡



②⑨ 白滝山（五百羅漢像）



構成文化財の写真一覧

③〇地蔵鼻（鼻の地蔵）と美可崎城跡



③②余崎城跡



③①岡島城跡



③③棕浦の法楽おどり



構成文化財の写真一覧

③④ 倭崎城跡



③⑤ 向上寺三重塔



③⑥ 瓢箪島



③⑦ 光明寺の浪分観音



③⑧ 鳴滝山城跡



構成文化財の写真一覧

③⑨ 浄土寺宝篋印塔



④⑩ 百島茶臼山城跡



④⑪ 法楽焼



④⑫ 水軍鍋

